

テレビ・ニュースのリードにおける 主題の特徴について

Andreea SION

キーワード：「は」マーク、指示対象の同定可能性、先行文脈

1. はじめに

ニュースの談話は基本的に「最近起きた出来事」を話題とし、それについて述べる談話である。情報伝達のしかたによって、ニュースは（例えばラジオまたはテレビで放送されるような）音声のニュースと（新聞などに載っているような）文字のニュースの二つに大きく分けられる。音声のニュースの場合、情報の伝達が送信者（放送局のスタジオにいるアナウンサー）から受信者（不特定多数の視聴者）へ行われるが、受け取り手は伝達に積極的に参加していない、すなわち追加情報の提供などを要求できないため、一方的なものである。また、音声のニュースは線状的なものであり、例えば新聞のニュースのような文章による伝達の場合と異なって、受け取り手が以前伝えられた情報へ戻って、再確認することができない。

ニュースの二つの大きいタイプにおいて、情報伝達のしかたが異なるため、ある程度異なった言語手段の使用や異なった内容構造も期待される。しかし、実際のデータの考察上、音声のニュースと文字のニュースの間に用いられた言語手段のレベルでも内容構造のレベルでも類似点が明らかに見える。

ニュース一般において、内容の容易な理解・処理に重要な役割をはたすのはニュースの最初の発話（リード）である。ここでは受け取り手にとってまだ未知である出来事について、「いつ」・「どこ」・「だれ」などのような基本的な質問に対する主な情報が導入される。しかし、受け取り手が次に伝えられる内容について何らかの文脈を全く持たないため、その内容と受け取り手が既に持っている知識が連結できるように様々な言語手段が使用される必要がある。また、リードにおいて、そこではじめて導入される主題は後続する談話の成立を支え、情報伝達を発展させる機能を持っている。従って、重要な要素であるため、最初の出現から理解・処理しやすいものでなければならない。

本稿ではテレビ・ニュースのリードを扱い、談話一般と新聞のニュースを考察対象とした先行研究と比較しながら、特に①主題の指示対象が持っている性質と②主題の提示に先行する文脈の機能という二つの側面に注目し、リードの中で現れる主題がどんな特徴を

持っているのかを明らかにすることを目的とする。

本研究の対象とするものは、ニュースのリードで「は」でマークされる主題¹である。実際のデータのコーパスとして、NHKが通常のニュース番組で放送した、様々な話題について伝えている300件のニュースの中から、リードで「は」でマークされる主題が現れるニュース(149件)を用いる。ただし、リードは場合によって複数の文²によって構成され、複数の主題を持ったリードもあるため、研究の対象となる主題の合計は155件である。

本研究で扱う「は」で提示される主題はその名詞句の統語的な機能によって三つのタイプに分けられる。ニュースのリードで一般的に主題として提示されるのは(a) 主格名詞句(129件=83.2%)であるが、このほかに(b) 破格構文の中で現れる名詞句(18件=11.6%)と、意味的に(a)タイプに近いと思われる(c) 動作主を表す名詞句+「では」(8件=5.2%)という主題も見られる。それぞれのタイプを以下の例(1)～(3)に示す。

(1) 主格名詞句+「は」：

東南アジアとオセアニアを歴訪中の小泉総理大臣は、オーストラリアのキャンベラに到着しました。[NHK ニュース 7/30.04.02]

(2) 名詞句+「は」(破格構文)：

旧ソビエトのウクライナの、ザポリジャ州にある軍の弾薬庫で発生した火災は、一夜明けた7日になっても、散発的な爆発が続いています。[NHK ニュース 10/7.05.04]

(3) 名詞句+「では」(動作主)：

今夜、神奈川県大和市の住宅で、幼児二人が死亡しているのを、帰宅した父親が見つけた。警察では、二人の死因を調べると共に、行方がわからなくなっている母親を捜しています。[NHK 関東・甲信越地方のニュース 22:55 / 10.09.02]

¹ ニュースの資料では、リードで主題が以下の例(a,b)のように、ゼロ・マークや「ですが」などのような手段によって提示されることもあるが、本研究の対象外とする。(例 a) さて、この夏、多摩川と横浜の鶴見川に現れた、アザラシのタマちゃん(0)、今月に入って姿が見えなくなっていたんですが、今度は JR 横浜駅に近い繁華街の川で目撃したという情報が、相次いで寄せられました。[NHK News 7 / 12.09.02]
(例 b) さて、今日開票が行われています、インドの総選挙ですが、野党の国民会議派が大幅に議席を伸ばし、バジパイ首相の与党連合は敗北を認めて、6年ぶりに政権が交代する見通しとなりました。[NHK ニュース 7 / 13.05.04]

² この中に、以下の例のような、並列の関係にある複数の節によって構成されるリードも含まれている。
(例) 日本の収録ロケット、H2A の 3 号機が、鹿児島県の種子島宇宙センターから打ち上げられ、[節 1] / ロケットは 2 機の衛星を軌道上で分離して、[節 2] / 打ち上げは成功しました [節 3]。[NHK News 9 / 10.09.02]

例(1)では、「は」でマークされる名詞句は主節の述語(「到着した」)に対して主語であり、主格を取っている。これに対して、例(2)では主題として提示される「火災」は述語の「続いている」と格関係を持っているとは考えにくい、文全体は「火災」について述べているため、意味的に密接な関係にあると言える。

最後に例(3)では、動作主を表す名詞句(「で」格)が主題化される。例(3)のような指示対象は全て「警察」のクラスに属していて、ニュースのリードで現れる主題の約5%にすぎないが、意味的に一般的に主題として現れる動作主の主格名詞句に近いと考えられる。また、例(1)のような「は」でマークされる主題の中で、「警察」が主格名詞句の主題として現れるケースは18件(=全体の11.6%)である。「は」と「では」が用いられた発話の間に意味内容の大きい違いが感じられないため、「では」でマークされるものも研究の対象に含むことにした。

次に、先行研究に基づいて、上記で述べたような主題がニュースの談話においてどんな状況で現れるか、またはどんな特徴を持っているかを分析する。

2. 先行研究と本研究の立場

2.1 Lambrecht (1994)

本研究の分析の理論的枠組みとなるものは、コミュニケーションの際に伝達される情報を認知的な観点から扱う先行研究である。この中で Chafe (1976, 1987), Prince (1981), Givón (1988), Lambrecht (1994) などのような研究があげられるが、本稿では代表的であると考えられる Lambrecht (1994) の研究に注目したい。

Lambrecht (1994) は指示対象の受け取り手にとっての同定可能性 (identifiability) という概念に基づいている。同定可能性は聞き手の知能に特定の指示対象の描写が既に存在しているか否か、それにどのような認知的状態で存在しているかということに大きく関わっているとされる。Lambrecht (1994) では談話の中で現れる様々な指示対象が受け取り手にとっての認知的ステータスによって以下のように分類される (p. 109)。

(4) A. 同定可能な指示対象 (identifiable)³

1. 活性的な指示対象(active) : 発話時に聞き手の意識の焦点にあるもの
2. アクセス可能な指示対象(accessible) : 発話時に聞き手の意識の焦点にはないが、談話の先行文脈あるいは場面から、あるいは推論的に同定できるもの
3. 不活性的な指示対象(inactive) : 聞き手の長期記憶に保存されているが、活

³ Lambrecht (1994)では、「同定可能」のクラスは次の(a)(b)(c)のように、聞き手の知能に存在するものによって構成されるとされる。(a) « mother », « the sun »のような、聞き手のディスコースモデルに唯一の指示対象を持っている名詞句、または「クラス」を意味する総称名詞句;(b) ディスコース内・外的な世界において、顕著な指示対象を持っている名詞句;(c) 様々な認知的フレームに属する指示対象。

性化していないもの

B. 同定不可能な指示対象 (unidentifiable)

4. 先行文脈に何らかのかたちで連結された、新しい情報 (anchored)
5. 先行文脈にまったく連結されていない新しい情報 (unanchored)

また、Lambrecht (1994) では、指示対象にそれぞれが持っている同定可能性の程度によって、主題になりやすいものとなりにくいものがあるとされ、次のような階層が提示される。一番主題になりやすいものは同定可能な指示対象の [活性的な指示対象] であり、次に [アクセス可能な指示対象] > [不活性的な指示対象] > [先行文脈に連結された新しい指示対象] > [先行文脈に連結されていない新しい指示対象] の順序で、指示対象は主題になりにくくなるとされる。すなわち、談話で主題になりやすいのは発話時に聞き手の意識の焦点あるいはその周辺にあるもの、それを処理するには低い認知コストが要されるものである。逆に主題になりにくいものは発話時に聞き手の意識の焦点にないもの、処理するにはより高い認知的コストを要するものであると言える。

2.2 野田 (1984)

野田 (1984) では新聞記事の冒頭文における有題文・無題文の選択に関わる要因が分析されている。この論文における考察対象はテレビ・ニュースのリードではなく、新聞記事の冒頭文である。テレビ・ニュースと新聞のニュースは伝達のしかたがことなることから、内容構造や使用される言語手段が異なることが予測されるが、実際のデータの考察上、テレビ・ニュースのリードと新聞記事の冒頭文ではほとんど同じ現象が見られる (Sion 2003)。

本稿では、野田 (1984) で提案される条件をテレビ・ニュースの談話に応用し、比較をひろげたい。

野田 (1984) では、主格名詞句をマークする「は」と「が」の選択に関与する条件として以下のものが挙げられている。

(5) 主格名詞句の性質に関する条件⁴

- (a) 主格名詞句が意志的な動作の動作主である場合⁵: 文の述語が表す動作が予想しやすく、または動作主がその動作することに意外性が少なければ、文は有題文になる。(野田 (1984) p. 68)
- (b) 主格名詞句が意志的な動作の動作主でない場合⁶: 主格名詞句の指示対象が

⁴ 野田 (1984) ではこのほかに、述語の性質に関する条件、語順に関する条件と文章全体の中での冒頭文の機能に関する条件も説明されている。

⁵ 例えば主格名詞句が意思的な動作を行う人物、団体、機関などの場合。

⁶ 例えば主格名詞句が物や事柄、あるいは非意志的な動作を行う人物などの場合。

読み手の関心を集めており、予想しやすい場合、文は有題文になる。(p. 70)

これらの条件を反映する例としては、以下の例 (6)、(7) があげられている。

(6) 大阪管区気象台は二十五日、近畿地方の梅雨が明けた、と発表しました。(朝日新聞、野田 (1984) p. 68 より)

この例では、梅雨などを発表することは気象台の本来の業務であり、十分予想できるため、条件 (a) が満たされ、有題文が用いられるとされる。

(7) 秋田県沖で二十六日正午に発生した大地震は、地震の直後に津波が日本海沿岸を襲い、調査が進むにつれて被害が増大した。(朝日新聞、野田 (1984) p.70 より)

例 (7) は地震に関するニュースの続報である。「地震」という話題が既に導入され、その上読み手の関心を集めているため、その場で現れることが予想しやすい。ここで条件 (b) が満たされ、有題文が用いられるとされる。

主格名詞句の性質に関して、野田 (1984) と Lambrecht (1994) の研究では、類似点が見られる。野田 (1984) では、有題文の選択に、「受け取り手の関心」「予想しやすさ」、あるいは「低い意外性」という概念が関わるとされる。ある指示対象が受け取り手の関心や予想、期待の対象であることが、受け取り手がそれについて何らかの知識を持っている、ないしは別の知識に基づいてそれを推理できることを表していると考えられる。同様に、Lambrecht の指示対象における [活性化の状態] と [アクセス可能性] という概念も聞き手が既に持っている知識に関与する。この点で、二つの研究が同じ基本的な概念を共有していると言える。ただし、分析のため、本稿では「新聞記事」という限定された談話のタイプを扱った研究 (Noda 1984) ではなく、談話一般のより広い範囲の現象を考察対象とした Lambrecht (1994) を用いたい。

2.3 本研究の立場

本研究は Lambrecht (1994) で提案されている、指示対象の [同定可能性] に基づいている。しかし、Lambrecht (1994) の指示対象の同定可能性による分類は一般的に談話の様々なタイプで見られる現象を反映すると思われるが、ニュースの実際のデータの考察上、少なくともリードの主題において、より厳密な分類が必要であると感じられる。テレビ・ニュースという特定の談話の場合、特に Lambrecht の [同定可能な指示対象] とされるクラスに、認知的に性質の異なる指示対象が当てはまると考えられる。また、指示対象は性質によって談話の中で異なった現象を伴う。具体的には、Lambrecht の [同定可能な指示対象] のクラスには、受け取り手が発話時にすでに知っている指示対象と、発話時に未知

であるが、何らかの認知プロセスによって同定できる指示対象の両方が含まれている。言語のレベルで、前者は談話に導入される際に先行文脈を要しない場合が多いが、後者の同定は先行文脈あるいは談話の場面に大きく関わっている。

以上のことから、本研究では実際のニュースの考察の結果、以下の(8)のような、より妥当な分類を提案する。分類の基準は受け取り手がニュースのリードが伝えられる際に、主題として提示される指示対象について既に知識を持っているか否かという基準である。

(8) [テレビ・ニュースのリードで提示される主題の指示対象の分類]

- A. 受け取り手が発話時に既にそれについて知識を持っている指示対象 (知られている指示対象)
 - 1. 活性的な指示対象
 - 2. アクセス可能な指示対象
- B. 受け取り手が発話時にそれについて知識を持たない指示対象 (知られていない指示対象)
 - 3. 先行文脈で導入された、同定可能な指示対象
 - 4. 先行文脈から推論的に同定可能な指示対象
 - 5. 文脈化された新しい指示対象

(A)グループに属するものは、頻繁にニュースの話題になり、受け取り手に多く知られているかつ受け取り手の関心を集めている指示対象である。これはさらに二つに細かく分けられる。

- 1. 日本全国向けの機関あるいは国際的、かつ重要な機関：日本の皇族と政府機関、行政機関など、他国の大統領と政府機関など → Lambrecht (1994) の「active / 活性的な指示対象：発話時に聞き手の意識の焦点にあるもの」に対応する
- 2. 日本の政治・社会・経済にかかわる、よりローカルな組織またはその代表者（例えば審議会、委員会など）→ このタイプの指示対象は発話時に受け取り手の意識の焦点になくても、記憶に保存される情報で、発話時に容易に活性化できるものである。→ Lambrecht の [inactive / 不活性的な指示対象] に対応する

一方、(B)グループに属するものは、個人あるいは様々な事物など、(A)グループより個別な指示対象であり、受け取り手に既に知られていると考えにくいものである。同定のしかたによって、さらに三つのタイプに分けられる。

- 3. 先行文脈で導入された、同定可能な指示対象 → Lambrecht の [accessible / 先行文脈から可能な指示対象] に対応する
- 4. 先行文脈から推論的に同定可能な指示対象 → Lambrecht の [accessible / 推論的にアクセス可能な指示対象] に対応する

5. 文脈化された新しい指示対象 → Lambrecht の [unidentifiable (anchored)/
同定不可能、連結された新しい指示対象] に対応する

以上 Lambrecht (1994) と本研究の分類を対応させると、次の表 1 のようになる。

【表 1】指示対象の分類：Lambrecht (1994) と本研究の分類の関係

Lambrecht (1994)		本研究	
A. 同定可能な指示対象	1. 活性的	1. 活性的	A. 発話時に知られている指示対象
	2. アクセス可能	2. アクセス可能	
	a. 先行文脈から	3. 先行文脈で導入され、同定可能	B. 発話時に知られていない指示対象
	b. 場面から*	4. 先行文脈から推論的に同定可能	
c. 推論的に	5. 文脈化された、新出		
B. 同定不可能な指示対象	3. 不活性的		
	4. 新 (+連結)		
	5. 新 (-連結) *		

* Lambrecht (1994) の「談話の場面からアクセス可能な指示対象」と「連結されていない、同定不可能な新しい指示対象」は今回考察したニュースのリードで現れなかった。

3. 資料で見られる主題の指示対象の特徴

次に、2 節で述べた指示対象の分類に基づいて、テレビ・ニュースのリードで導入される主題の指示対象の性質とその具体的な現れ方や頻度との関係を分析したい。

考察したニュースに出現したリードの主題における同定可能性による指示対象のタイプとその頻度を以下の表 2 に示した。

【表 2】リード文の主題における、同定可能性による指示対象のタイプとその頻度

主題の指示対象のタイプ		出現数及び頻度 (割合)	
A. 知られている指示対象	1. 活性的	71 (45.8%)	計 115 (74.2%)
	2. アクセス可能	44 (28.4%)	
B. 知られていない指示対象	3. 先行文脈に既に導入・同定可能	20 (12.9%)	計 40 (25.8%)
	4. 先行文脈から推論的に同定可能	7 (4.5%)	
	5. 文脈化された新しい指示対象	13 (8.4%)	
合計		155 (100%)	

表 2 から明らかのように、リードで主題として最も多く現れるのは活性的な指示対象であり、受け取り手にとって「知られている」ものの合計は全体の約 74% を占めている。

(例 9・10)

タイプ1：活性的な指示対象

- (9) 小泉総理大臣は今日、北海道を訪れ、／コンピュータを使った酪農経営の現場や、大学や企業などが連携して、新たな産業の育成を目指す取り組みなどを視察しました。
[NHK ニュース 11/8.05.04]

タイプ2：アクセス可能な指示対象

- (10) 学習につまづいた経験のある生徒を受け入れる高校として、東京都教育委員会は、二つの都立高校を指定し、入学する生徒を、学力検査は行わずに、面接や実技などで選ぶことになりました。[NHK 首都圏ニュース 20:45 / 12.09.02]

これらのタイプの指示対象は 2 節でも述べたように、頻繁にニュースの話題になり、受け取り手に多く知られているものであるが、例 (9) の「小泉総理大臣」のような指示対象はどの状況でも同定しやすいあるいは喚起しやすいのに対して、例 (10) の「東京教育委員会」のような指示対象はある知られている上位のクラス（「委員会」）に属しているため容易に活性化される情報であると考えられる。

一方、考察した資料では比較的主题になりにくいものも約 25%あり（例 11-12）、この中で先行研究で同定不可能、したがって最も主题になりにくいとされる指示対象も約 8%見られる（例 13）。

タイプ3：先行文脈に既に導入された指示対象

- (11) 今年 6 月、埼玉県春日部市の定時制高校の生徒が死亡した、集団暴行事件で、刑事処分が相当だとして、障害致死のついでに起訴された 16 歳の少年二人の初公判が開かれ、二人は起訴事実を認め、一生をかけてつづかないたいと述べました。[NHK 関東・甲信越地方のニュース 19:55 / 10.09.02]

例 (11) では、リードの主題となる「二人」は、主題化される時点で、既に「16 歳の少年二人」で導入されているので、同定可能になる。

タイプ4：先行文脈から推論的に同定可能な指示対象

- (12) 1. 次は、薬局での強盗事件です。
2. 押し入った男は、店内に飾ってあった製薬会社の人形 2 個を奪って逃げました。
[NHK 首都圏ニュース 845 / 14.05.04]

例 (12) では、リードの第 2 文で「は」でマークされる名詞句の指示対象はタイプ 3 と異なって、最初の出現から主題として提示されている。リードの第 1 文の「薬局での強盗

事件」で提示される情報（すなわち、動作主・犯人がいることと、その犯人があるところに入ったこと）から同定可能であると考えられる。

タイプ5：文脈化された新しい指示対象

- (13) [千葉県佐倉市の住宅で、今月3日死亡しているのが見つかった] 52歳の主婦は、その後の捜査で、首を圧迫されて死亡していたことがわかりました。[NHK 首都圏ニュース 845/6.05.04]

最後に例(13)では、主題として提示される指示対象は先行文脈に明示的あるいは暗示的に言及されていないが、先行する連体修飾節でそれについていくつかの情報が提供され、理解を容易にさせている。

以上のことから、今回考察したニュースでは、主題として現れやすい指示対象は順番に、[活性的] > [アクセス可能] > [先行文脈に既に導入] > [文脈化された新しい指示対象] > [先行文脈から推論的に同定可能]であることが明らかになった。この階層は最後の二つのタイプにおいて、先行研究の Lambrecht (1994) で指摘される順序（すなわち、[推論的に同定可能] > [新+連結]）と逆の傾向が見られる⁷。

次の4節では、テレビ・ニュースのリードで現れる主題の性質と主題が提示される前に与えられる先行文脈との関係を考察したい。

4. 主題の先行文脈

一般的に、ニュースの最初の発話であるリードでは、ニュースの主な話題が伝えられる前に、受け取り手がそれを容易に位置づけたり、既に持っている知識と連結させたりするために、文頭で何らかの文脈が提供される。

今回扱ったニュースのリードにおいて、ある主題が提示される前に文脈が提供される場合を以下の表3に示した。

表からも明らかのように、リードでは、多くの場合では主題が導入される前に何らかの文脈が提供される傾向（全体の85.1%）があるが、活性的あるいはアクセス可能は指示対象を持った主題は直接にリードの冒頭に導入される場合も見られる（全体の14.8%）。一方、より同定しにくい指示対象を持った主題は必ず先行文脈に連結させる。

⁷ ただし、本研究では主題以外の指示対象、すなわち無題文の中に現れる指示対象は分析されていないため、この傾向が正確に現実を反映しているかどうかは現在の段階では明らかではない。

【表 3】リードにおける主題の先行する文脈

主題の指示対象のタイプ	文脈なし（主題はリードの冒頭にある）	文脈あり（主題はリードの文中にある）	計
1. 活性的	17 (23.9%)	54 (76.1%)	71 (100%)
2. アクセス可能	6 (13.6%)	38 (53.5%)	44 (100%)
3. 先行文脈に既に導入・同定可能	0	20 (100%)	20 (100%)
4. 先行文脈から推論的に同定可能	0	7 (100%)	7 (100%)
5. 文脈化された新しい指示対象	0	13 (100%)	13 (100%)
計	23	132	

以下では、リードの文 1 の文頭に直接導入される主題と先行文脈のある主題を順番に考察する。

4.1 先行文脈のない主題

直接にリードの冒頭に導入される主題は全体の主題の 14.8%を占めている。これらの主題は全て頻繁にニュースの話題になる日本の政府機関あるいは経済機関などのような指示対象を持っており、日本人の受け取り手にとって活性的あるいは少なくともアクセス可能な指示対象である。（例 14-15）

(14) 活性的：皇太子様は今日、ヨーロッパ三ヶ国の訪問に出発されました。[NHK ニュース 10/12.05.04]

(15) アクセス可能：東京電力は、福島第1原子力発電所の1号機で、緊急時に原子炉を冷やす装置にひびを無断で修理した上で、修理が見つからないよう、偽装工作を行っていたことが新にわかりました。[NHK ニュース 9/10.09.02]

4.2 先行文脈のある主題

リードで現れる主題の 85.1%は先行文脈を持っているが、指示対象の性質によって、提供される文脈が異なった役割を果たすと考えられる。

4.2.1 タイプ1とタイプ2：活性的・アクセス可能な示対象

受け取り手にとって既に知られている、活性的・アクセス可能な指示対象を持った主題の導入に先行する談話で、ほとんどの場合では、過去の事柄が述べられており、先行文脈は主題として提示される指示対象をその事柄と関連させる役割を持っていると考えられる。具体的な言語手段として、例（16）のように、先行文脈で「～問題で・問題を受けて、～事件・事故（で）、～について」などのような関連性を表す表現が用いられることが多い。

- (16) ニッポンハムグループによる、牛肉偽装問題で、農林水産省は、偽装を行った子会社の、ニッポンフードの、三人の元営業部長、明日、詐欺の疑いで警察に告発する方針をかためました。 [NHK ニュース 6 / 11.09.02]

4.2.2 タイプ 3, 4, 5 : 既に導入された指示対象、推論的に同定可能な指示対象、文脈化された新しい指示対象

主題が同定しにくい指示対象を持った場合、与えられる先行文脈がその指示対象について何らかの情報を加えたり、空間的・時間的に位置づけたりし、その指示対象の同定を容易にする機能を持っていると考えられる。

以下の例 (17) は、事件の場所・状況に関する追加情報が説明的な連体修飾節の手段で提供される例である。

- (17) 〔旧ソビエトのウクライナの、ザポリジャ州にある軍の弾薬庫で発生した〕火災は、一夜明けた 7 日になっても、散発的な爆発が続いています。 [NHK ニュース 10 / 7.05.04]

以上のことから、指示対象の性質によって、すなわち同定しやすさによって、主題に先行する文脈の違いが明らかである。主題が同定しにくい指示対象を持った場合、先行文脈がその指示対象について情報を加えることによって、同定しやすくする機能を持っているのに対して、同定しやすい指示対象の場合、先行文脈はむしろ主題として提示されるある指示対象のある事柄と関連させる役割を持っている。

5. まとめ

本研究では、主題の指示対象を認知的な観点から扱った先行研究と実際のデータの考察に基づいて、特に指示対象の性質と主題としての提示の状況に注目し、テレビ・ニュースのリードにおける主題の分類とそれぞれのタイプの特徴を記述することを目指した。

テレビ・ニュースのリードで現れる主題は、大きく分けて、以下のふたつのタイプの指示対象を持っている。

① 国の重要な政府機関あるいは経済機関などのような、受け取り手に多く知られている、かつ、受け取り手の関心を集めている指示対象。これらは、認知的なステータスとして、発話時に受け取り手の知識の焦点にあり、活性的なあるいは発話時に容易に活性化できる指示対象である。ニュースのリードでは最も頻繁に主題として提示され、先行文脈なしでリードの冒頭に導入されることも多い。また、先行文脈がある場合、これは談話で提示される主題を別の (過去の) 事柄と関連させる機能を持っている。

② 発話時に受け取り手に既に知られていない、個人あるいは様々な事柄などのような、より個別な指示対象。これらは受け取り手にとってより同定しにくいものであり、主題として提示される場合は必ず何らかの先行文脈が提供される。この場合、先行文脈は指示対

象について情報を加えたり、あるいは空間的・時間的に位置づけたりし、同定を容易にさせる役割を持っている。

本研究で扱ったデータはテレビ・ニュースのリードであるため、特定の談話タイプの限定された部分（すなわち、談話の冒頭の部分のみ）である。一方、本稿で紹介した二つの先行研究において、Lambrecht（1994）では談話一般が分析され、野田（1984）では日本語の新聞記事の冒頭文が分析されている。従って、この点では、本研究の対象は先行研究で扱われている対象と性質が異なると言える。それにも関わらず、多少異なるところもあるものの、今回考察した談話で見られる傾向が先行研究で明らかにされた傾向と一致しており、従来指摘された現象を裏付けると考えられる。

実際のデータの考察上、音声のニュースと文字のニュースは談話の最初の発話において重要な類似点を持っていることが明らかになった。これらの類似点はニュース一般の談話の特徴であるといえる。

ただし、ニュースの最初の発話に後続する談話（発展）において、音声のニュースと文字のニュースでは性質の異なった現象が観察されている。今後の課題として、談話の冒頭の部分であるリードに限らず、音声のニュースと文字のニュースを比較しながら、ニュース全体の談話に注目し、同じ認知的な観点から分析を深めたい。

【参考文献】

- Chafe, W. L. (1976) "Givenness, Contrastiveness, Definiteness, Subjects, Topics, and Point of View", in Ch. N. Li (ed.), *Subject and Topic*, New York, Academic Press, pp. 25-55.
- Chafe, W. L. (1987) "Cognitive Constraints on Information Flow", in R. Tomlin (ed.), *Coherence and Grounding in Discourse*, Amsterdam, John Benjamins, pp. 21-51.
- Givón, T. (1988) "The Pragmatics of Word-Order: Predictability, Importance and Attention", in M. Hammond et al. (eds.), *Studies in Syntactic Typology*, Amsterdam, John Benjamins, pp. 243-284.
- Lambrecht, K. (1994) *Information Structure and Sentence Form*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Prince, E. F. (1981) "Toward a Taxonomy of Given-New Information", in P. Cole (ed.) *Radical Pragmatics*, New York, Academic Press, pp. 223-255.
- Sion, A. (2003) 「テレビ・ニュースのリード文における有題文・無題文の選択」『筑波応用言語学研究』10, pp. 69-82.
- 野田尚史 (1984) 「有題文と無題文—新聞記事の冒頭文を例として—」『国語学』136, pp. 65-75.